平成１１年度　Ｂｌｏｃｋ６

課　題　Ｎｏ．６

「異常なやきもち」

東京女子医科大学
11.11'99.
学事部

無断で複写・複製・転載すると著作権侵害となることがありますのでご注意下さい。

シート１

加藤さんは76歳の男性で、10歳下の妻と2人暮らし。2年前、突然、つぎのようなことを言い出した。

加藤さん「おまえ、その下着、少し派手なんじゃないか。」
　妻　「あら、そんなことないわよ。」
加藤さん「隣の男（隣家に住む67歳の男性）に見せるためか。」
　妻　「えっ、・・・・・、あなた、いったい何を言い出すの。」
加藤さん「わかってるんだぞ、おまえがあの男と会っているのは。」
　妻　「・・・・・」
加藤さん「やっぱりそうだな。顔色が変わった。身に覚えがあるからだろう。」
　妻　「ちょっと、なに言ってるの。」
加藤さん「いつもそこ（縁側）から隣をじっと見てるじゃないか。おかしいと思ってたんだ。」
　妻　「なにをばかなことを・・・」
加藤さん「この前も買い物に行ったふりして、会っていただろう。おまえが帰ってきたすぐあとに、あの男も帰ってきてたじゃないか。もう、何度もおれは見てるんだ。おまえの嘘は全部わかってるんだぞ。」
　妻　「ちょっと、まってくださいよ。あなた、ちょっとぼけてきたんじゃないの？」
加藤さん「なんだと！もう、しらばっくれるのもいい加減にしろ。おれがいないとき、家にまで連れ込んで。火鉢についていたぞ、あの男の精液が！」

シート２

加藤さんは最近になって物忘れを訴えるようになったので、これを機に、かねてから加藤さんの異常なやきもちを心配していた娘たちに勧められ、神経内科を受診した。
神経内科では、以下のような検査が行なわれた。

血液一般、生化学検査、尿検査：特に異常所見なし。
頭部ＣＴ：資料１
脳波：正常
改訂 長谷川式簡易知能評価スケール（HDS-R）：資料２
神経学的にも特に異常所見はみられなかった。

シート３

家族から加藤さんの異常なやきもちについて相談を受けた医師は、加藤さんに精神科受診をやんわりと勧めてくれた。翌日、加藤さんは精神科を訪れた。

精神科での加藤さんと家族の話によると、2年前に妻と隣家の男性が性行為をしている夢をみて以来、妻の行動に疑いを抱くようになった。（シート１の会話にあるように）日常のさまざまなことから妻の浮気を確信していき、問い詰めるようになったという。妻が否定すればするほど、その態度から確信は強まっていった。性行為を頻繁に迫るようになり、妻が拒否すると、ますます怒り、嫉妬を燃やした。夜も眠れなくなった。ついに数ヵ月前から殴る蹴るの暴力がはじまり、隣家の男性宅にも何度か電話で抗議し、鞄にナイフを隠しもって、「妻と愛人を殺して俺も死ぬ」と言うようになった。なお、妻の浮気に関すること以外には、おかしなことを言うことはなかったという。

加藤さんは小柄でかくしゃくとした老人で、きちんとした背広姿で、礼儀正しく医師の診察に応じた。意識は清明で、見当識、理解力は十分保たれていた。迂遠の傾向をみとめる以外、特にめだった思路の乱れはなく、理路整然と話をすることができた。妻の浮気の話になると激しやすかったが、気分障害（躁鬱病）を示唆するような気分や意欲全般の障害は認められなかった。明らかな幻覚もなかった。

なお、精神科的疾患の遺伝負因はない。

シート４

加藤さんの生活史、性格、発病の頃の生活状況、ライフサイクルの変化は以下のとおりである。

12人兄弟の第6子として生まれ、10歳で呉服屋に奉公に出された。苦学して夜学を出て、20歳で独立して洋服の仕立てを始めた。34歳で結婚、3子をもうけた。商売は順調に進み、最後にはある大企業の社長や重役の御用達にまでなった。仕事に対するプライドは非常に高かった。70歳で引退。68歳から郊外に引っ越し、妻と2人で暮らしている。

性格はもともと頑固、几帳面、自己中心的で、疑い深く、一方で小心な面もあり、心気的だった。仕事一徹で、無趣味、世間の狭い人だった。妻によると、年をとってからは、このような性格傾向がいっそう強まり、我慢が効かず、些細なことで怒りっぽくなった。

とくに引退してからは、それまで精魂を傾けてきた仕事もなくなり、ますます世間が狭くなった。自宅にひきこもることが多くなり、転居先の新しい隣人とのつきあいもほとんどなかった。日頃、顔をあわせて話すのはほとんど妻だけという生活だった。一方、妻のほうは新しい隣人とのつきあいも積極的で、外出もよくしていた。

シート５

加藤さんは、医師や家族の勧めにしたがって、渋々ながら入院に同意した。向精神薬を投与し、面接を重ねたところ、不眠も改善し、しだいに冷静さをとりもどしていった。面接にあたっては、あえて嫉妬妄想を否定せず、むしろその背景的な要因と考えられたライフサイクル上の変化、その中での夫婦関係の変化などをふりかえっていった。2カ月ほどすると、浮気の話になっても激することはなくなり、かつて苦労をかけたことをしみじみと話して、「もう浮気も過去のこととして、新たな気持ちで、また妻と暮らしたい」と希望するようになった。しかし、暴力によって全身あざだらけになった妻は、同居を頑なに拒否した。結局、次女夫婦に引き取られることになり、入院4カ月目に退院となった。次女宅は、本人がかつて長く住んでいた家でもあり、旧知の隣人ともつきあうようになった。１年ほどすると、長女夫婦と同居していた妻とも時々会うようになった。

なお、退院後は定期的に外来通院して、医師の面接を受けている。妻に対する嫉妬妄想は完全に訂正されるにはいたっていないが、本人の中ではすでに過去のものとなっており、新たな妄想の再燃はない。